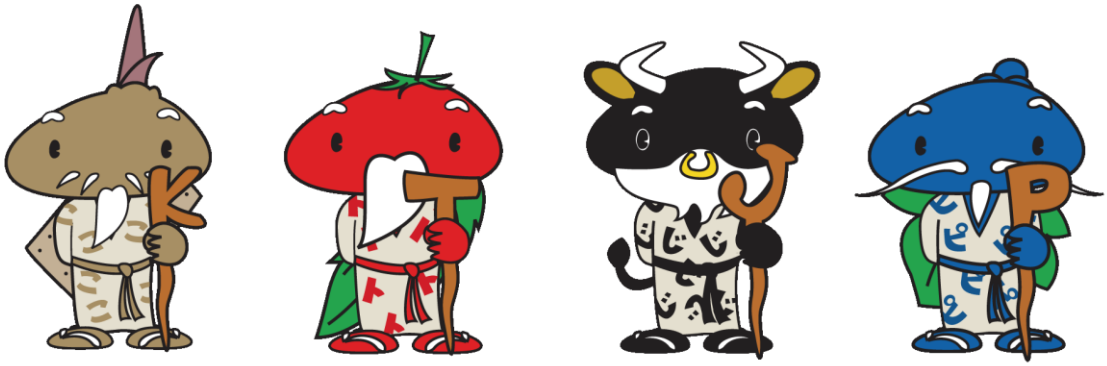
神石高原町農業振興ビジョン

～「源流の里」で“赤と黒のプロジェクト”推進～



令和４年４月

広島県神石高原町

≪　目　次　≫

◆序章　ビジョンの策定について　1

１　ビジョン策定の趣旨
２　ビジョンの位置づけ
３　目標年次

◆第１章　神石高原町の農業の現状と課題　2

１　神石高原町農業の現状
２　神石高原町農業の課題

◆第２章　神石高原町農業の目指す方向　4

１　神石高原町農業の将来像
２　神石高原町農業の基本目標
３　ビジョンの施策体系

◆第３章　ビジョンの施策展開と実現に向けた取り組み　7

基本目標Ⅰ　担い手が牽引する産地の育成・強化
（１）　地域特性を生かした園芸作物と和牛の振興
（２）　産直市場の売上向上
（３）　有機農業・環境保全型農業の推進
基本目標Ⅱ　生産力の高い担い手の育成・強化
（１）　認定農業者・集落法人の経営力強化
（２）　新規就農者の確保・育成
（３）　６次産業化の推進
基本目標Ⅲ　次世代につなげる農地の活用
（１）　農業生産基盤の整備
（２）　農地の流動化の推進
（３）　農業公社の機能強化

◆第４章　赤と黒のプロジェクト推進の概要　10

１　担い手を核とした「神石高原㊐トマト」の産地拡大
２　「神石高原ぶどう部会が牽引する販売額２億円のピオーネ産地」へ
３　神石高原和牛の里再構築プロジェクト

序章　ビジョンの策定について

１ ビジョン策定の趣旨

神石高原町の農業振興ビジョンは，平成１５年３月に町村合併を見据えて「神石郡広域農業振興ビジョン」を策定し,「食と農を中心とした新しいまちづくり」を基本理念に掲げ農業振興に取組んできました。平成２３年度には１０年後の令和２年度を目標年次とし，トマト，ぶどうの園芸産地や和牛のブランド化を進めてきました。

しかし，農業従事者の高齢化や新規就農者の育成が厳しく，耕作放棄地の増加や担い手不足等の多くの課題が増す中，これからの中山間地域での農業を取り巻く情勢はより一層困難を極めています。又，一方では安心・安全な食の提供や農村環境の維持及び保全の重要性が高まっています。

国においては，２０２０年（令和２年）３月に新たな「食料・農業・農村基本計画」が閣議決定され，食料自給率の向上と食料安全保障を確立していくことを基本的な方針として定めました。

広島県においては，２０１０年（平成２２年）に「２０２０広島県農林水産業チャレンジプラン」を策定し，２０１５年（平成２７年）に達成すべき目標を掲げて取組を進めてきました。又，２０１４年（平成２６年）には「農林水産業アクションプログラム第Ⅰ期」を策定し，さらに２０１８年（平成３０年）には「農林水産業アクションプログラム第Ⅱ期」を策定し，「ひろしま未来チャレンジビジョン」の施策体系と整合させた上で，「担い手が将来の生活設計を描ける経営の確立」を目指し取組を進めてきました。２０２０年（令和２年）に策定された次期総合計画「安心▷誇り▷挑戦▷ひろしまビジョン」との考え方と連動して１０年後の姿を見据えながら「２０２５広島県農林水産業アクションプログラム」を定めました。

このビジョンでは，これまでの成果を引継ぎ，課題を整理し，新たな農業の流れや農業者及び消費者のニーズに対応した神石高原町の農業の将来像を示し，その実現に向けて取組を行うために策定するものであります。

２　ビジョンの位置づけ

このビジョンは，本町の最上位計画である「神石高原町第２次長期総合計画」の分野別計画の性格を有するものです。

国の新たな「食料・農業・農村基本計画」（２０２０年（令和２年））や広島県の「２０２５広島県農林水産業アクションプログラム」を踏まえつつ，「神石郡広域農業振興ビジョン」を発展的に継承し，本町の地域特性を活かした新たな将来像を示し，施策の総合的かつ計画的な推進を図るものです。

３　目標年次

２０２２年度（令和４年度）から２０２６年度（令和８年度）を「神石高原町農業振興ビジョン」の第Ⅱ期とし，取組を進めます。

第1章　神石高原町農業の現状と課題

１　神石高原町農業の現状

本町の人口は，平成１６年の合併当時１２，４５４人でありましたが，年々人口減少が進み，令和３年においては８，６６９人となっています。又，６５歳以上の高齢化率も平成１７年の４２．８％に対し，令和２年には４６．９％となっており，高齢化の加速を示しています。農業就業人口については，平成２２年が１，９５０人で７５歳から７９歳が最も多く全体の２３％であり，平均年齢が７０．５歳となっており，平成２７年においては，１，４２８人，７５歳から７９歳の割合が２１％，平均年齢が７２．１歳と上がっています。

本町の標高は，５００ｍ～７００ｍであり，昼夜の寒暖差により良質な米や野菜が生産されており，神石牛をはじめ，トマト、ぶどう，こんにゃくの産地となっています。令和元年度には産直市場さんわ一八二ステーションをリニューアルオープンし，連日多くの方が来場されていますが，生産者の高齢化により農産物の出荷の減少が危惧されます。

農地所有適格法人は，１４法人設立されており，認定農業者は５７経営体で担い手に農地を集積し耕作放棄地の防止に取組んでいますが，過疎化や高齢化に伴いその取組も限界を向かえつつあります。

２　神石高原町農業の課題

大規模な農地集積や効率的な生産も困難な中山間地域の中で，将来にわたり安定的に生産活動を継続していくためには，産地としての出荷量の確保が大きな課題となります。産地としての確立されたイメージを消費者に伝えるとともに，「神石高原町産」として安心・安全な農産物を提供するという生産者の「生命や環境の破壊を伴わない農業」に対する意識をより一層高め，産直施設を利用しての農産物の販売や新商品開発などによる神石高原町全体のイメージアップや次世代を担う新規就農者の育成をはじめ，担い手による更なる農地集積，経営の拡大を行うことによって町内の農地を守り，生産活動を継続していくことが大きな課題です。

（１） 産地の育成・強化

▸トマト産地の持続的発展

令和３年度末では１０．７ha の栽培面積ですが，令和４年度に完成した黒木谷トマト団地の面積を追加しても１３ha 余りとなります。ハウス資材の高騰によりトマト研修生の募集も令和２年度から中止しており，今後大幅に栽培面積が増える見込みは今のところありません。研修制度の内容を精査していき，町として何が支援できるのかを検討しなくてはなりません。

▸ぶどうの産地化の推進

神石高原のぶどう（ピオーネ）は市場や消費者から高い評価を受けているものの，生産者は高齢で栽培面積も横ばいの状況です。町全体で１８．６ha

の栽培面積ですが，高齢の生産者がリタイアした後の園地が放棄されている状況もあります。JA 福山市神石高原ぶどう部会を中心として県や関係機関と連携し，ぶどう研修の制度化を検討しています。

▸神石高原和牛の産地の再構築

生産者の高齢化と新規就農者の育成が困難なことが和牛飼育の大きな課題と言えます。広島牛改良センター跡地の「和牛の里」の整備により飼育頭数の維持が可能となりましたが，今後の事業展開の仕組みづくりや支援体制の再構築が急がれます。

▸産直市場における農産物の売上向上のための神石高原町ブランドの展開

令和元年度にリニューアルオープンした道の駅さんわ一八二ステーションでの農産物等販売額はリニューアル以来伸び続けており，消費者からは「神石高原町産」として認知されているが，生産者の高齢化により，今後，安定的に農産物を供給できるかが大きな課題である。

（２） 担い手の育成・強化

▸地域ぐるみで農地を守る集落法人化の限界

集落法人化については，平成１４年から農地集積と設立の可能性の高い地域から推進を行い設立されましたが，後継者の育成の限界を向かえ，新たな法人の設立はおろか，既存法人の経営の維持すら危うい状況となっている組織が見受けられます。今後は福山地域集落法人連絡協議会神石高原支部や(株)神石高原農業公社が核となり，法人間での機械の貸し借りや経営等の連携が必要となってきています。

（３） 農地の活用

▸農業生産基盤の整備と農地の流動化

農業者の高齢化及び都市への人口流出により，農業生産の縮小とともに農地の利用率が低下し，耕作放棄地が増え，周辺農地や景観に悪影響を及ぼしています。優良な農地を保全・維持していくために神石高原農業振興協議会（令和３年６月設立）を中心に協議を重ね，耕作放棄地の増加に歯止めをかけなければなりません。

▸有害鳥獣被害防止

猪，猿等の有害鳥獣による農作物被害が年々増加し，非常に深刻な状況となっています。神石高原町有害鳥獣捕獲実施隊の協力により捕獲頭数も増えてはいますが，被害は後を絶ちません。又，近年，ニホンジカの捕獲頭数も増えており，新たな対策が必要です。

▸農業公社の機能強化

水稲を中心とした受託作業を行っている農業公社の活動は，農地の荒廃防止に一定の効果があるものの，より一層の機能強化が求められています。又，作業範囲の広域化や設備の整備も必要であり，町内農地を守っていく上で集落法人の取りまとめ役としても大きな役割を果たしていかなくてはなりません。

第2章　神石高原町農業の目指す方向

1　神石高原町農業の将来像

神石高原町の豊かな自然を活かしつつ，農地を維持し集落を活性化しながら，生活に必要な所得を確保していくために，都市住民との交流の中で消費者の支援も期待しつつ「人と自然が輝く高原のまち」を創っていく必要があります。

このため，本町では，町政運営の基本である「神石高原町第２次長期総合計画」において「地域資源を活かした活力ある産業と交流のまちづくり」を農業振興の推進項目の一つとして位置づけ，国県の支援策を十分に活用し，町としてどのような支援が効率的なのかを模索しながら，町全体としての「神石高原町ブランド」を確立していきます。

また，高冷地の気候を活かした高原野菜と伝統ある和牛の育成により，自然循環機能を増進し，安全で良質な農産物の提供を行い，消費者の需要に応える農業を目指します。そして，「神石高原町第２期総合戦略」人と自然が輝く高原のまち安心幸せプラン２０２４（２０２０年（令和２年））の若い世代が働きたくなる職場や環境確保の中でも農業の振興について，経営力の高い担い手の育成及び集落での話し合いに基づく地域の核となる担い手への農地集積を促し，耕作放棄地を再生していくため「担い手不足の解消」や「高収益作物への転換」を進めていくための新たな土地利用計画の策定や農業振興計画の策定を進めます。

2　神石高原町農業の基本目標

神石高原町の農業の将来像を実現するために，取り組むべき農業振興の方向を示した基本目標を次のとおり定めます。

基本目標Ⅰ　担い手が牽引する産地の育成・強化

自然豊かな山々に蓄えられた湧水により，神石高原町の地域特性を活かした園芸作物と和牛の振興，そして安心安全な高原野菜の出荷，農業者と消費者相互の理解を図りながら，産地の育成強化を推進します。

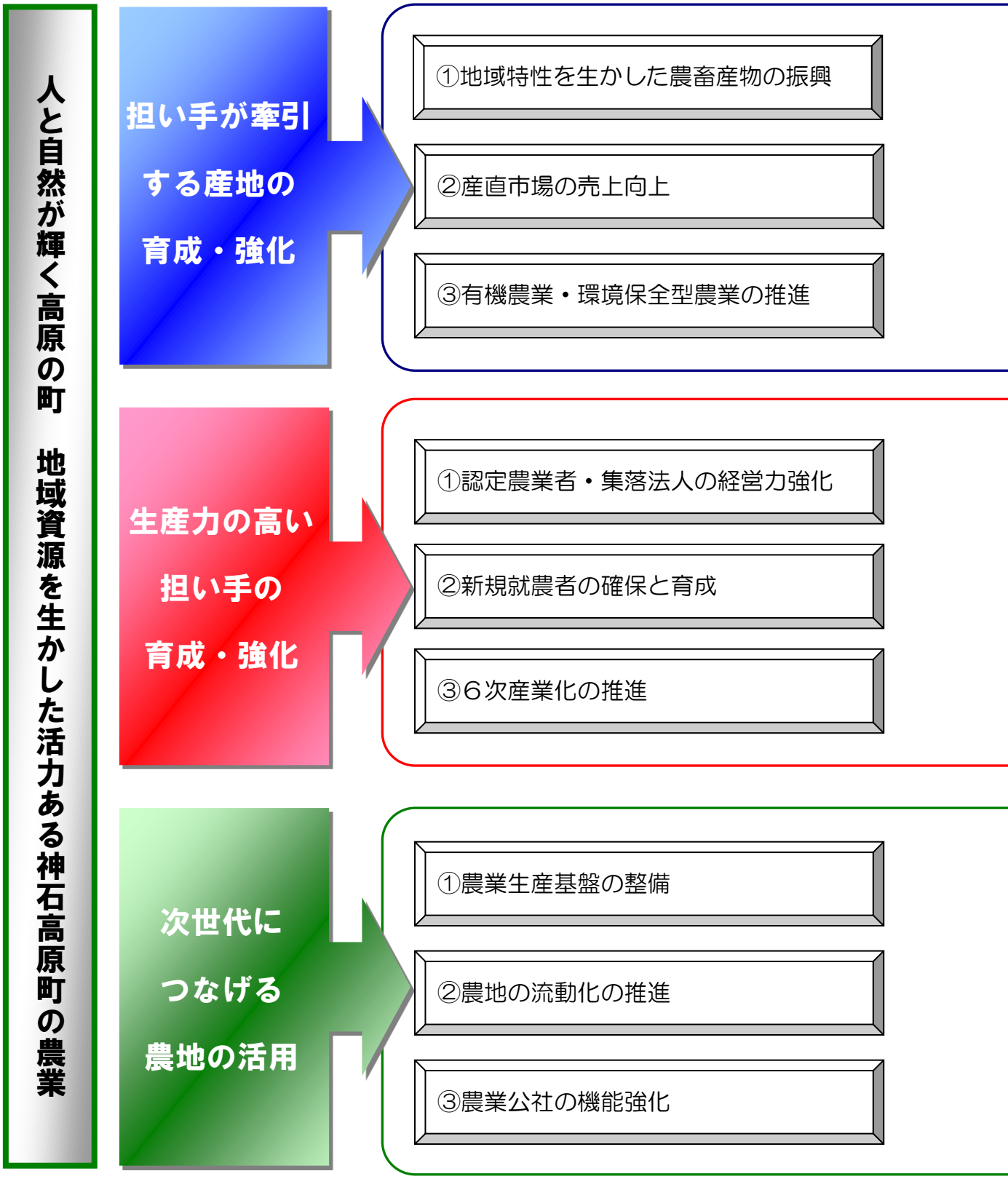
基本目標Ⅱ　生産力の高い担い手の育成・強化

認定農業者及び集落法人の経営力を強化するとともに，新規就農者の確保や育成を進め，商工業者と連携しながら販売力を高め，農業者の所得向上を目指します。

基本目標Ⅲ　次世代につなげる農地の活用

農業生産基盤の整備や優良農地の確保や有効利用を図るとともに，耕作放棄地の防止・再生・活用と農業公社の機能強化・有害鳥獣被害防止対策を推進し，農地を保全します。

3　ビジョンの施策体系


人と自然が輝く高原の町　地域資源を生かした活力ある神石高原町の農業
担い手が牽引する産地の育成・強化
①地域特性を生かした農畜産物の振興
②産直市場の売上向上
③有機農業・環境保全型農業の推進
生産力の高い担い手の育成・強化
①認定農業者・集落法人の経営力強化
②新規就農者の確保と育成
③６次産業化の推進
次世代につなげる農地の活用
①農業生産基盤の整備
②農地の流動化の推進
③農業公社の機能強化

トマト・ぶどうの振興

和牛の振興

多彩な農産物の振興

食の安全確保

食育の推進

認定農業者・農業法人の育成

集落法人の経営力強化

集落法人及び担い手間の連携強化

新たな担い手の確保

農・商・工・観・学連携による６次産業化の推進

女性・高齢者が持つ多様な能力の確保

農地の維持と改良整備

耕作放棄地の再生と利用

有害鳥獣被害防止

農地の流動化と荒廃防止

新規就農者への支援

第３章　ビジョンの施策展開と実現に向けた取り組み

基本目標Ⅰ　担い手が牽引する産地の育成・強化

（１）地域特性を生かした園芸作物と和牛の振興

□トマト・ぶどうの振興

▸認定農業者が核となり小規模団地整備の導入によるトマト産地の拡大

規模拡大による経営安定と市場への販売促進による神石高原㊐トマトのブランド力強化

▸神石高原ぶどう部会が牽引するぶどうブランドの確立

集落法人や新規就農者を中心とした栽培面積と生産量の拡大

▸農業公社と農協等の連携による就農者育成，就農システムの構築

技術の修得，農地の確保とマッチングを一元的に取組む営農開始サポート体制の構築

□和牛の振興

▸地域内一貫生産・直販を行う流通体系の構築

町内産肥育素牛の導入促進による一貫生産と直販モデルの促進によるブランド化の推進

（２）産直市場の売上向上

□多彩な農作物の振興

▸観光客の集客力強化を通じた産直市場の販売力強化

産直市場の経営戦略に基づいた個性化と連携による神石高原イメージの発信と販路拡大

▸加工新商品開発と新鮮・安全・安心の提供促進

町内人口構造に対応した販売支援体制の構築や商品開発を通じた 6 次産業化の推進

（３）有機農業・環境保全型農業の推進

□食の安全確保

▸有機農業，耕畜連携による資源循環型農業の推進による食の安全確保

自然循環機能の増進による環境負荷の低減を通じ安全で良質な農産物の供給

□食育の推進

▸食育の推進による農産物生産者の意識改革と消費者への理解促進

農業体験や都市農村交流を促進するイベントの開催と産直市場を核とした情報発信

基本目標Ⅱ　生産力の高い担い手の育成・強化

（１）認定農業者・集落法人の経営力強化

□認定農業者の育成

▸生産基盤の整備による規模拡大で安定経営

新たな団地整備や施設の確保と新しい生産技術の導入等による農業所得の向上などの経営力向上

□農業法人の育成

▸雇用力，信用力，継承力を高めるための法人化の促進

法人化の推進による雇用の拡大などを通じた農業後継者受け入れ

□集落法人の経営強化

▸水田転換等による園芸作物導入による収益力の向上

園芸作物導入促進を通じた水田の畑地化，畑の集積促進による水稲依存経営からの脱却

□担い手間の連携強化

▸水田放牧，飼料稲の利活用，堆肥流通などの連携強化

集落法人と拡大が進む畜産経営の連携による地域資源循環と農地の有効活用による低コスト化の推進

（２）新規就農者の確保・育成

□集落法人間の連携強化

▸農地の面的な集積と集落法人間の連携強化

集落点検等を通じた対象地域の選定と農作業の効率化を考慮した，集落法人間の連携

□新たな担い手の確保

▸新規就農者の確保

新規就農者（個人，企業参入など）が営農可能なサポート体制の強化

未来に向けて持続可能な農業の確立のための油木高校，農業技術大学校との連携強化

▸企業参入の促進

他産業から農業への参入を通じた農業生産構造の変革

（３）6次産業化の推進

□農・商・工・観・学連携による6次産業化の推進

▸都市部業者とのマッチングと販路開拓による“地産外消”の推進

道の駅，コンビニ，高校，参入企業の連携強化と産直市場の経営マネジメントによる販路開拓

□女性・高齢者が持つ多様な能力の確保

▸加工・新商品開発を通じた多彩な能力の確保と活用

神石高原特有の地域の素材を活かした特産品開発と販売

基本目標Ⅲ　次世代につなげる農地の活用

（１）農業生産基盤の整備

□農地の維持と改良整備

▸未利用地等の有効活用による産地振興

未利用地の確保，造成，施設整備を通じた優良農地と就農者のマッチングの推進と規模拡大の誘導

□耕作放棄地の再生と活用

▸改良整備などを通じた農地の有効活用

改良整備，水田放牧を通じた耕作放棄地の再生と園芸作物導入や水田放牧などの有効活用の促進

□有害鳥獣被害防止

▸有害鳥獣被害防止対策の実施による農業生産活動の活性化

有害鳥獣被害の軽減または未然防止のため，被害防止計画に基づいた地域ぐるみの取り組みによる安心して営農できる環境を確保

（２）農地の流動化の推進

□農地の流動化と荒廃防止

▸農用地利用改善団体による出し手と受け手の明確化

農地の集積，担い手の育成など推進すべき地域の明確化と農用地利用改善団体の設置促進

▸農地利用集積円滑化団体の機能強化による農地のマッチング

農用地利用改善団体設置地域を対象とした農地の流動化促進

（３）農業公社の機能強化

□新規就農者への支援

▸研修制度による新規就農者への支援

トマト，ぶどうの研修ほ場確保と研修体系の見直しによる受入体制の再構築

第4章　赤と黒のプロジェクト推進の概要

担い手を核とした「神石高原㊝トマト」の産地拡大

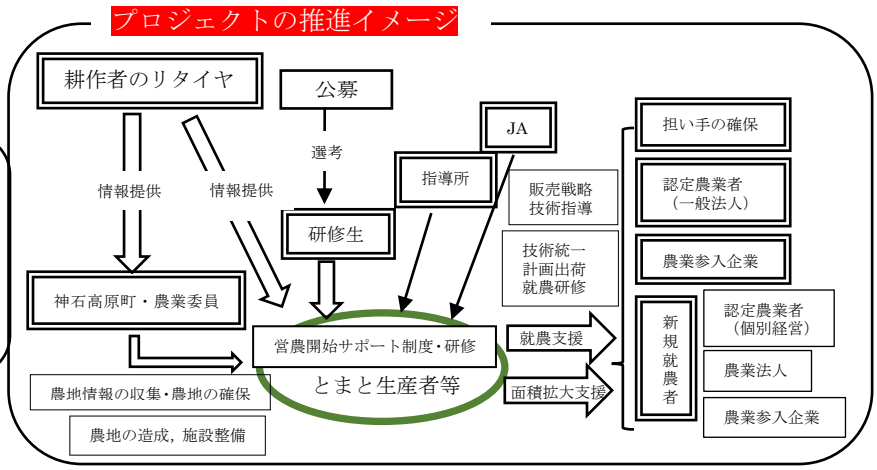
≪現状と課題≫

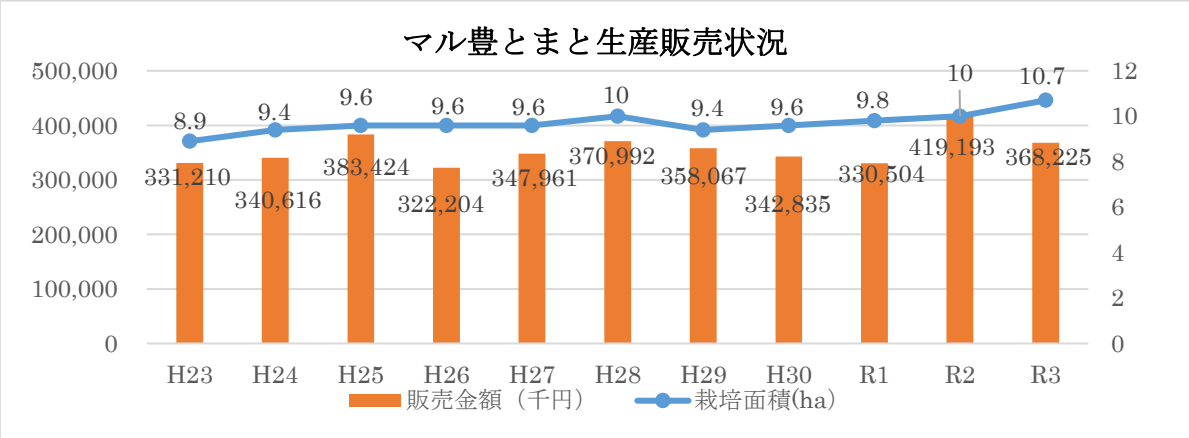
●昭和 55 年から産地化に取組み，県内の主要産地として期待されている。 ➡ ■生産者の高齢化で将来の産地維持に不安がある。

●平成 28 年度から㊝とまと新規就農者研修事業を開始し，１０世帯が入植した実績がある。 ➡ ■資材の高騰により，新規就農時の初期投資に多額の費用が必要。

≪地域プロジェクトの概要≫

【５年後のめざす姿】
- ○トマト栽培面積：１２ｈａ
- ○トマトの販売額：４．４億円
- ○認定農業者：１９人
- ○認定新規就農者：２人
- ○認定農業者の単収：１２ｔ/１０ａ





≪目標値≫

指標	現状値	目標値	
	(R3)	R6	R8
トマトの栽培面積（ha）	10.7	11	12
トマトの販売額（億円）	3.6	4.2	4.4
認定農業者（人）	10	16	19
認定新規就農者（人）	8	3	2

「神石高原ぶどう部会が牽引する販売額1.1億円のピオーネ産地」へ

ピオーネ仙人

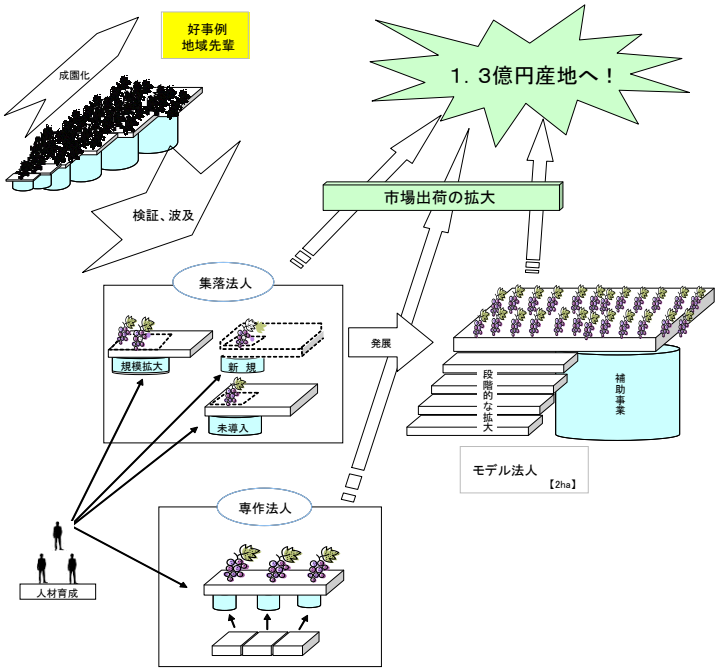
≪現状と課題≫

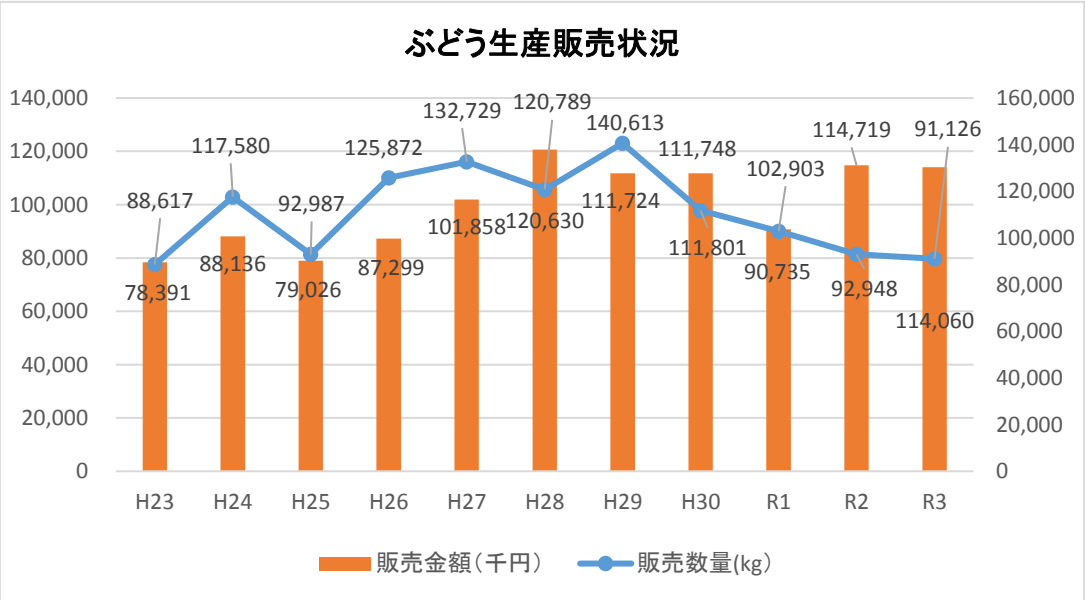
・生産者は 135 名で平均栽培面積は 6.6a であり，生産者は高齢化で今後が懸念される。
・産直市でのぶどう販売量は飽和するが，市場向けはまだ出荷量が少なく販売力が弱い。
・ぶどう導入集落法人では高評価だが，実績が拡大につながっていない。

≪地域プロジェクトの概要≫

【５年後のめざす姿】
〇ぶどう栽培面積：１４．３ｈａ
〇ぶどうの販売額：１．１億円

〇ぶどうの担い手の目標
集落法人等　７　法人　８．３　ha
認定農業者（個人）３人　３　ha
認定新規就農者（個人）
３人　３　ha





【平均単価】　（単位：円）

H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3
888	749	849	693	767	998	794	999	881	1,234	1,251

≪目標値≫

指　　標		現状値	目標値	
		(R2)	R6	R8
ぶどうの栽培面積（ha）		11.9	14.0	14.3
ぶどうの販売額（億円）		1.1	1.1	1.1
	うち担い手の販売額（億円）	0.23	0.24	0.25
ぶどうの担い手数（経営体数）		10	10	13

神石高原和牛の里再構築プロジェクト
～担い手の育成と産地の再構築～

神石牛仙人（通称牛仙人）

≪現　状≫

■ 神石高原町は，古くから和牛の産地であるが，飼養農家の高齢化や後継者不足が著しい。

■ 和牛経営は依然として小規模経営が多く，持続的な経営体が少ない。

≪地域プロジェクトの概略≫

【めざす姿】

- 産業として自立できる農業の確立
- 活力ある和牛産地の営み
- 地域への貢献

【取組の視点と内容】

担い手の確保・経営力の強化

1 生産力の強化
- ★優良子牛の供給と増産・・育成強化・ETによる子牛増産
- ★優秀雌牛の確保と増殖・・統一方針に基づいた育種改良

2 販売力の強化
- ★直販システムの確立・・モデルの育成と販路開拓
- ★地域内一貫生産体制の確立・・町内産和牛肉の供給

3 新たな担い手の確保
- ★大規模畜産業や企業の参入促進
- ★集落法人の和牛導入
- ★新規就農者確保・・高校等連携

耕畜連携

5 神石高原和牛ｲﾒｰｼﾞ向上戦略(放牧の推進)
- ★消費者に見せる・・放牧景観の形成
- ★農地を活かす・・耕作放棄地・獣害対策
- ★経営に貢献する・・飼養コストの低減

6 自給飼料基盤の確保と拡充
- ★資源循環型農業の推進
  - ・WCSを活用した安心・安全な牛肉生産と低コスト化

4 経営力の強化
- ★財務力・雇用力・連携力強化

≪目標値≫

指　　標		現　状 R3	目標値 R8	めざす姿 R13
担い手経営体数		２０	２５	３０
神石高原和牛飼養頭数（頭）		１，５９６	２，０００	２，５００
	繁殖牛	８７４	１，１００	１，３００
	肥育牛	７２２	９００	１，２００
子牛販売価格（対市場平均%）		９８	１０５	１１０

神石高原町農業振興ビジョン

令和 4 年 4 月
編集・発行　神石高原町
〒720-1522　広島県神石郡神石高原町小畠 1701 番地
TEL 0847-89-3330